

第62回東伏見スポーツサイエンス研究会

日時 2020年2月3日(月) **16:30~18:00**

場所 早稲田大学79号館(STEP22) 305教室

演題

コーチング場面における言葉

—「指導者」と「学習者」の対話に着目して—

広瀬健一(東京学芸大学)

■本講演では、コーチング場面で使用されている言語について、特に「指導者」と「学習者」の対話的情况で交わされる言葉の特質やその言葉によって引き起こされる学習の過程を中心的議題とする。この議論から、コーチング場面における言語の理解の仕方やその役割を示すことができると考えている。

指導者と学習者の対話的情况に焦点を絞ると、「直示的」表現である「科学言語」と「比喩的」表現である「わざ言語」に二分されることが明らかにされている。「科学言語」は、その言語が示す対象を厳密に定義することが重要視される一方で、コーチング場面では多義的で曖昧な言葉も使用されている。これまでの実践系研究領域では、コーチング場面における多義的で曖昧な言葉に対して、科学性の欠如という理由で懐疑的な評価がなされていた。加えて、コーチングの場面で指導者は言葉(指導言語)によって指導を行うが、その言葉は学習者の学びにどのように貢献しているのか、という問いに対しては、これまで明確な回答は得られていなかった。

こうした現状を踏まえて、今回は、コーチング場面の多義的で曖昧な言葉の再検討を行った研究、また、運動と言葉との関係を学習の面から検討した研究をそれぞれ紹介し、その意義と問題点について考える。本研究はコーチングにおける発話の内実について、近代の言語学や中世および近代の教育思想・言語論分野の知見を援用し、コーチングの場面でその適用を考える一試論である。

■プロフィール:2017年、筑波大学大学院人間総合科学研究科3年制博士課程コーチング学専攻修了。博士(コーチング学)。現在、東京学芸大学特任講師、日本体育大学大学院スポーツ文化・社会科学系期限付一般研究員、筑波大学体育系非常勤研究員。論文:「身体教育における指導言語の意味づけに向けた試論:言葉による学びの可能性をめぐる」体育・スポーツ哲学研究, 41巻1号, 5-15頁(2019)、「スポーツにおける言語論再考:コーチング場面で話される言葉に着目して」体育・スポーツ哲学研究, 40巻1号, 81-90頁(2018)。

